

6-0 唯物史観の成立史

1、唯物史観の成立史

マルクスの唯物史観の成立史を、簡単に、見てみましょう。

①仕事の序説、1844年『独仏年誌』への掲載

「1842年から1843年にかけて、『ライン新聞』の編集者として、はじめて私は、いわゆる物質的利害関係に口だしせざるをえなくなって、困惑した。……

私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、その仕事の序説は、1844年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究の到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解できるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、18世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。」(マルクス『経済学批判』(序言)全集、13巻、5-6ページ)

②1845年、『ドイツ・イデオロギー』での展開

エンゲルスは『資本論』第3巻の序文で「どこでもいつでも政治的な状態や事件はそれに対応する経済状態によって説明されるという発見」が「マルクスによって1845年になされた」ことを述べている。内容は、次の「唯物史観の内容」の「項」を参照して下さい。

③1847年、マルクス『哲学の貧困』で基本点を整えおえる

マルクスは、「われわれの見解の決定的な諸点は、プルードンに反対して1847年に刊行した私の著書『哲学の貧困』のなかで、たんに論争のかたちではあったが、はじめて科学的に示された。」(『経済学批判』(序言)全集、13巻、8ページ)と述べ、エンゲルスは、「本書は、1846-1847年の冬、マルクスが彼の新しい歴史・経済観の基本点をはっきりと整えおえた時期に書かれたものである。」(『『哲学の貧困』ドイツ語第1版への序文』)と述べています。

そしてマルクスは、1865年1月24日付けのシュヴァイツァーあての手紙(『プルードンについて』)で、マルクスが『哲学の貧困』で、⑦経済的諸範疇を、物質的生産の一定の発展段階に照応する歴史的な生産諸関係の理論的表現と見ていたこと、①マルクスは、プルードンのように、ユートピア主義者のやり方で、「社会問題の解決」のための公式を先験的にひねり出すのではなく、解放の物質的諸条件をつくり出す運動の現在の生産諸関係に対する批判的な認識のなかから科学をくみださなければならないと考えたことを述べています。マルクス・エンゲルスは『哲学の貧困』を、その見解を展開する機会としました。

なお、プルードンの、ユートピア主義者のやり方で、「社会問題の解決」のための公式を先験的にひねり出す手法は、2019年の参院選の選挙政策の作成手法であり、「マルクス修正主義者・改良主義者」の不破さんの手法です。

④1859年6月、マルクス『経済学批判』(序言)で唯物史観の定式化

物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定す

るのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、既存の生産諸関係、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときから社会革命の時期が始まる。

なお、『経済学批判』（序言）で唯物史観の定式化の詳しい内容については、次の「唯物史観の内容」の「項」を参照して下さい。

以上が、唯物史観の定式化の経緯とその大雑把な内容ですが、『資本論』等の文献については、ホームページ「B ものの見方、考え方」を参照して下さい。

II、唯物史観の内容

それでは、唯物史観の内容を『ドイツ・イデオロギー』等で見てみましょう。

①1845年、マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』

マルクス＝エンゲルスの歴史観の結論

「けっきょくのところで、これまで述べてきた歴史観から、なおつぎの結論が得られる。1. 生産諸力の発展においてある段階に達すると、生産諸力と交通手段は既存の諸関係のもとでは、ただわざわいのもととなるだけで、もはや生産諸力ではなくて破壊力（機械装置と貨幣）となる——そしてこのことと関連して、社会のあらゆる重荷をになわされながらいかなる利益にもあずからず、社会から迫害され他のあらゆる階級と決定的に対立せざるをえない一階級が呼びだされる。この階級は全社会成員の大多数を構成する階級であり、そしてこの階級から根本的革命的必然性の意識、共産主義的意識が出てくる。この階級の地位を見てとることができれば、この意識が他の諸階級のうちにも形成されうるのは勿論である。2. 一定の生産諸力は一定の諸条件のわく内ではしか用いられえないのであるが、この諸条件は社会の或る一定の階級の支配の諸条件であり、この階級の所有から生じる、この階級の社会的な力は、そのときどきの国家形態のうちに**実践的・観念論的に**表現されるのであり、それゆえにどの革命的闘争も、これまで支配してきた一つの階級にほこ先を向ける。3. あらゆる従来革命においては、活動のあり方には一指もふれられないままで、ただこの活動の分配を変えること、労働を他の人々に新しく分配することが問題とされたのにたいし、共産主義革命は従来活動の**あり方**を槍玉にあげ、**労働**を取り除き、そしてあらゆる階級の支配を階級そのものとともに廃止する。なぜならこの革命を成就する階級は、社会のなかでもはや階級という意味をもたず、階級とは認められず、すでに今日の社会の内部でのあらゆる階級、あらゆる国籍等々の解体の表現であるからである。そして、4. この共産主義的意識の大量産出のためにも、また事柄そのものの成就のためにも、人間の大衆的な変化が必要なのであって、このような変化はただなんらかの実践的運動、なんらかの**革命**のなかでのみ行われうる。したがって革命が必要なのは、**支配階級**を倒すにはそれ以外に方法がないからというだけではなく、また**倒すほうの階級**はただ革命のなかでのみ古い垢をわが身から一掃して、社会を新しくつくりうる力量を身につけるようになるからである。」（レキシコン④-[10]P63上2～65上7、ホームページ「マルクス・エンゲルスの考えの紹介」→「B ものの見方、考え方」の「6-2」。この続きが「6-3」です。）

マルクス＝エンゲルスの歴史観の基礎——上部構造と土台、交通形態・市民社会と宗教・哲学・道徳等々。

「したがってこの歴史観は、次のことにもとづいている——すなわち、現実的生産過程を、

しかも直接的生の物質的生産から出発して展開すること、そして、この生産様式と結びついていて生産様式によって生みだされた交通形態を、つまりさまざまな段階の市民社会を、全歴史の基礎として把握すること、そして、市民社会をその国家としての行動において示すとともに、宗教・哲学、道徳等々、意識のあらゆるさまざまな理論的な産物と形態を市民社会から説明し、それらのものの成立過程を市民社会のさまざまな段階から跡づけることである。こうすれば、おのずからまたことがらをその全体性において(それゆえこれらさまざまな側面の相互作用をも)示すことができるのである。」(レキシコン④-[10]P65 上8～下8、「6-3」)

②1847年、マルクス『哲学の貧困』のポイント

マルクスのシュヴァイツァーあての手紙。(『プルドンについて』1865年1月24日)
「……、他方、彼(プルドンのこと——青山)が**経済的諸範疇を、物質的生産の一定の発展段階に照応する歴史的な生産諸関係の理論的表現とは解さないで、先在する永遠の諸理念に仕立てあげているのは、思弁哲学の幻想をともにするものだということ、そして、こういう回り道をして彼はふたたびブルジョア経済学の立場にたどりついている、ということ**です。」「……、また彼は、歴史的運動の、すなわちみずから**解放の物質的諸条件**をつくりだす運動の批判的な認識のなかから科学をくみだそうとはしないで、ユートピア主義者のやり方で、「社会問題の解決」のための公式を先験的にひねりだすのに役だつような、いわゆる「**科学**」を追い求めているのだということです。」(④-[37]P191の最初と二番目の下線部)

③1859年6月、マルクス『経済学批判』(序言)——唯物史観の定式化

マルクスは、『経済学批判』(序言)で次のように述べています。

「私の専攻は法律学であったが、しかしそれを私は、哲学と歴史を研究するかたわら副次的な学科として学んだにすぎない。1842年から1843年にかけて、『ライン新聞』の編集者として、はじめて私は、いわゆる物質的利害関係に口だしせざるをえなくなって、困惑した。……

私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であって、その仕事の序説は、1844年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究の到達した結果は次のことだった。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態は、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解できるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係に根ざしているものであって、これらの生活諸関係の総体をヘーゲルは、18世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって、「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが、しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない、ということであった。この経済学の研究を私はパリで始めたのであるが、ギゾー氏の追放命令でブリュッセルに移り、そこでさらに研究をつづけた。私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸として役だった**一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる**。人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係をとり結ぶ。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法的かつ政治的な上部構造がそびえたち、そしてこの土台に一定の社会的意

識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法的表現にすぎないが、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときから社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、徐々にであれ急激にであれ変革される。このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における、自然科学的に正確に確認できる物質的な変革と、人間がそのなかでこの衝突を意識し、それをたたかいぬくところの法的な、政治的な、宗教的な、芸術的な、あるいは哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー的な諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかは、その個人が自分自身のことをどう思っているかによって判断されないのと同様に、このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。一つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい、さらに高度の生産諸関係は、その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、けっして古いものにとって代わることはない。それだから、人間はつねに、自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。というのは、詳しく考察してみると課題そのものが、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、またはすくなくとも生成の過程にある場合にかぎって発生する、ということが、つねにわかるであろうから。大づかみにいって、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生産様式を、経済的社会構成が進歩していく諸時期としてあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的な生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがって、この社会構成をもって人間社会の前史は終わるのである。」(④-[52]P297-301、マルクス『経済学批判』(序言)全集、13巻、5-7ページ)

〈ポイント〉「**物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、……既存の生産諸関係と、……所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときから社会革命の時期が始まる。**」

このマルクスの『経済学批判』(序言)の「私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる。」以下が唯物史観を定式化したものです。